

## 「一九四六」王希奇(魯迅美術学院教授)神戸展開催趣意書

今回、神戸展を企画した主な理由としては、以下の三点になります。

一点目は、中国を代表する国民作家「魯迅」にちなんだ、魯迅美術学院王希奇教授の縦3 尺横 20 尺の大作「一九四六」には、戦争被害者や社会的弱者への思いが込められています。この大作の展覧会を日中友好の思いを込め、中国残留日本人関係者や華僑の方々がお住まいの阪神地区で開催したいからです。

二点目は満蒙開拓や旧満州(中国東北部)からの引揚の歴史を忘れてはならない思いと、併せて戦争が齎す被害と加害の実相を、戦争体験者二世として伝えたい思いからです。

三点目は、2022 年は日中国交回復 50 周年の節目の年柄です。1972 年 9 月 29 日に、故田中角栄首相と中国の故周恩来首相の間で調印されました。神戸展では 9 月開催に拘りました。日中不再戦・恒久的日中友好を心に刻み、故周恩来首相の「前事不忘 後事之師」(「前事を忘れざるは後事の師」)です。意識すると「過去を忘れず未来に活かそう」となります。)も忘れてはならない思いからです。

以下まとめました。

第二次世界大戦が終わった後、旧満洲(中国東北部)にいた日本人約 155 万人(軍人を除く)は、過酷で悲惨極まりない状況におかれていました。翌年 5 月頃から漸く日本への帰国が始まり、中国遼寧省葫蘆島港からは、3 年間で約 105 万人が日本に引揚げました。その葫蘆島港引揚の写真集の中に、「遺骨を抱いた男装の少女」を目にした中国人歴史画家・王希奇先生(2022 年 3 月現在 61 歳)は、自らの心の葛藤を乗り越え「戦争ではいつの時代も弱者が苦しむ。彼らも戦争の被害者だ。」という強い思いのもとに、油絵と墨絵の融合による独特の技法で、米国の引揚船に乗込もうとする憔悴しきった数百人の難民の姿を描き出しました。作品は縦 3 尺横 20 尺に及ぶ大作で、歩きながら鑑賞すると、まるで難民の一人になった気持ちになります。

日本国内での絵画展は、2017 年の東京美術倶楽部、2018 年の舞鶴引揚記念館、2019 年の宮城県美術館、2021 年の高知市文化プラザと、過去四回開催されました。今回の神戸展は 5 回目の開催となります。

さて、終戦直後の満州国の日本人たちは、徒歩や極めて少ない貨車などで逃避行を続けました。途中旧ソ連軍や現地住民の襲撃を受け、多くの死傷者が出ました。また、集団自決などの悲劇も生まれました。辿り着いた日本人収容所では、零下 30 度を超える真冬を越すことになり、餓死、凍死、病死など多くの災難に見舞われました。こうした中で親の死や離別によって、「中国残留孤児」や「中国残留婦人」と呼ばれる人が生まれました。

中国残留日本人問題研究の第一人者であり、中国「残留日本人孤児」を支援する兵庫の会代表世話人でもある神戸大学名誉教授の浅野慎一先生には、当 HP への資料提供を頂くとともに、満蒙開拓と中国残留日本人の全体像が分かるパネル展示について助言を頂きました。絵画展に併せて、神戸市灘中学高校での出前授業など、様々な取組みも予定しています。

2022 年は満州事変勃発 91 周年、日本引き揚げ開始 76 周年、そして何よりも「日中国交回復 50 周年」の記念すべき年柄です。中国残留日本人関係者や華僑の方々がお住まいの阪神地区で、また中国革命の先駆者・孫文が亡命した神戸で、王希奇先生の作品展を開催することは大きな意義があると考えています。

どうか趣旨をご理解賜ります様、心よりお願い申し上げます。

以上